



左より 伊藤 昇氏、斎藤秀一氏、梅津副会長、田畑会長

万世大路の原点がわかるすばらしい作品であり、万世コミセンに来館の折は是非ごらんください。

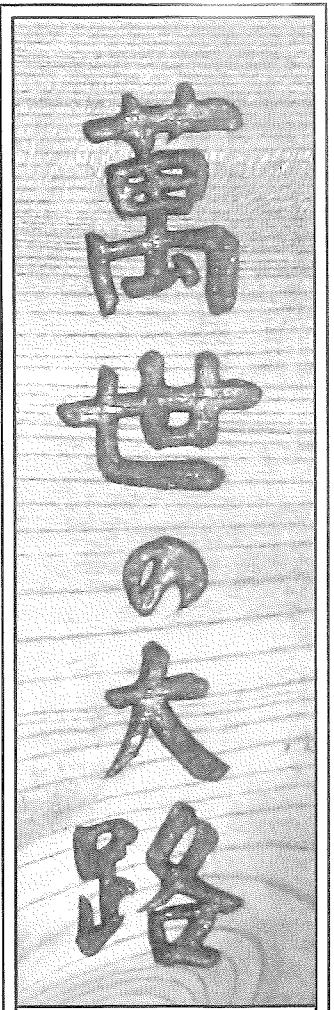
この作品は、万世コミセンの玄関ホール壁面に飾られている。

斎藤氏は、60年にわたり水彩画にとりこんでおり、現地に足を運んだら資料を確認しながら徐々にイメージをふくらませ、約1年かかって完成させたという。

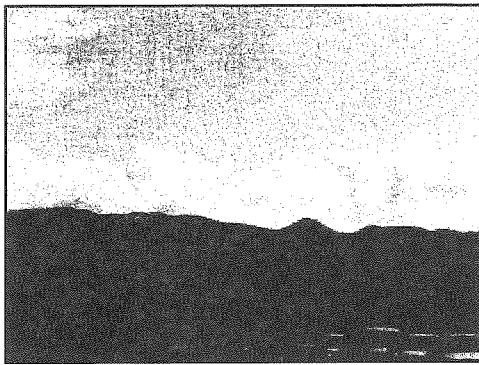
堂森出身で、米織服地販売卸「伊藤商店」代表の伊藤昇氏（通町6丁目）より万世大路保存会へ、明治時代に掘削された初代のトンネル「栗子山隧道」(水彩画)が寄贈された。

「栗子山隧道」(水彩画)の寄贈

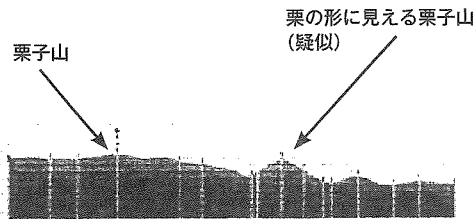
この絵は、水彩画家斎藤秀一氏（大町1丁目）の作品で開通当時の隧道をイメージした40号の大作。トンネルを抜けると、鮮やかな米沢の紅葉が目にとびこんでくる構図で、トンネルの暗さと空の明るさが、印象的な作品に仕上がっている。



第17号
平成27年3月15日発行
発行者
歴史の道 土木遺産万世大路保存会
会長 田畑 實
事務局
万世コミュニティセンター
☎0238-28-5381



米沢市万世町桑山付近から見る栗子山
H 21.10.10 撮影・阿部



栗子山付近尾根の縦断面図 地図ソフト・カシミールにより阿部作成

栗子山のこと

栗子山は、山の形が栗の形をしていることから栗子山と呼ぶようになったと伝えられているが、国土地理院の地形図を見ると、栗子山は栗の形をした突起状の山ではなく、その左側のなだらかな形をした山のピーク（標高1,216m）である。突起状の山のピークは標高1,202mで、遠目に見た限り、両者はほとんど同じ高さに見える。

やはり栗の形をした突起状の山が「栗子山」だったものが、後年、正確な測量をした結果、その隣の山の標高が高かったため、そちらを栗子山としたのではないかと想像がふくらむ。

万世大路の登り口の採石場の敷地から栗子山（標高1,216m）を探して該当する方向を見上げた。この栗子山、かつては「杭甲嶽」という名だったが、地元の人々は、山の全貌が栗の形の形に似ていることから栗子山と呼んでいたため、県令三島通庸の提案で、「栗子山」と称するようになったという。

しかし、地名の研究者は、「クリコ」の「クリ」は崩壊・浸食地形の意で、「コ」は「処」だろうといい、また、クリ（川の曲流・コ（接尾語）という説もあると紹介している。もし、地名研究家の説が有力とすると、山の形が栗の形の形をしているからというのは、後日のこじつけかもしれない。また、かつての山の名前「杭甲（クイコ）」と「栗子（クリコ）」の語呂が酷似しているのも気にかかる。

かつて栗子山は「杭甲嶽」と呼ばれた。三島が大久保利通に宛てた上申文書「米沢ヨリ福島二通スル刈安新道開削之儀ニ付伺」（明治9年12月）の文中の一部に、「米沢ヨリ東面二方リ花沢信濃町綱木村、及ヒ刈安村杭甲嶽ヲ経テ、福島県管内飯坂村ヨリ福島町へ達スルノ路線」とある。言うまでもなく、杭甲嶽というのは栗子山のことである。

（出典・「万世大路を歩く」）